

代表的な日本の農耕地土壌1

黒ボク土、褐色森林土、赤黄色土

日本の代表的な土壌を、2回に分けて紹介します。1回目は、台地や丘陵地に分布し、畑、樹園地、草地などとして利用されている、黒ボク土(全農耕地のうち約26%)、褐色森林土(同7%)、赤黄色土(同6%)の3種類です。

(農業環境インベントリーセンター 小原 洋)

黒ボク土

おもに火山灰から発達した、軽く柔らかい土壌です。黒くてホクホクしているところから黒ボク土と呼ばれるようになったといわれています。火山国の日本では、北海道、東北、関東、中国、九州地方の丘陵地、台地を中心に広く分布していて、畑や牧草地などの主要な土壌となっています。土壌がリン酸を強く結びつけるために作物はリンを吸収しづらく、かつては、生育に適さない土壌でした。しかし、リン酸肥料が普及したため、柔らかく水分保持力が高いという良好な物理性もあって、現在では広く畑作物が栽培されるようになりました。



未熟な黒ボク土
群馬県昭和村



黒く厚い腐植層をもつ黒ボク土
宮崎県綾町



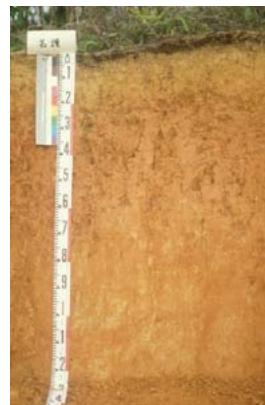
あまり黒くない黒ボク土
茨城県つくば市

褐色森林土 と 赤黄色土

火山灰の影響の少ない台地・丘陵地・山地には、褐色森林土と赤黄色土が分布しています。両土壌とも、自然状態では一般に酸性の強い低栄養な土壌です。褐色森林土は、黄褐色の次表層をもつ比較的若い土壌で、日本各地の山地、丘陵地に広く分布します。赤黄色土は、鮮やかな黄色や赤色の次表層をもつ、風化の進んだ比較的古い土壌で、有機物の蓄積が少なく、緻密で重く固いなど物理性の問題もある土壌です。西南日本や南西諸島に広く分布しています。



褐色森林土
北海道岩見沢市



赤黄色土
沖縄県名護市